

東京都ナガエツルノゲイトウ防除の手引

概要版 ver.1.00



令和6（2024）年3月



東京都環境局

目 次

I ナガエツルノゲイトウに関する基礎情報	1
1. ナガエツルノゲイトウの概要と生態	1
(1) 概要	1
(2) 生態	2
2. ナガエツルノゲイトウの形態	3
(1) 形態的な特徴	3
(2) 形態が類似する植物	4
II ナガエツルノゲイトウの防除	5
1. 防除の考え方	5
(1) 防除の基本的な考え方	5
(2) 生態と防除のポイント	5
2. 防除の流れ	7
3. 具体的な取り組み	8
(1) 生育・被害の確認	8
STEP 0 生育・被害状況確認調査の実施	8
(2) 生育・被害が確認された場合の対応	9
STEP 1 生育・被害状況確認調査の実施	9
STEP 2 防除の計画の作成	10
STEP 3 防除の実施	14
STEP 4 モニタリング調査	19

I ナガエツルノゲイトウに関する基礎情報

1. ナガエツルノゲイトウの概要と生態

(1) 概要

【分類】 被子植物 真正双子葉類 ナデシコ目 ヒユ科

【種名】 ナガエツルノゲイトウ（別名 ツルノゲイトウモドキ・ミゾツルノゲイトウ・エナガツルノゲイトウ）

【学名】 *Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb.

【分布】 南アメリカ原産。台湾・オーストラリア・リビア・米国に移入分布。

日本国内では 1989 年に兵庫県尼崎市で定着が初めて確認された。2023 年 3 月現在、関東・中部・近畿・中国・四国・九州の 25 都府県で確認されている。

国内への侵入過程は明らかではないが、アクアリウム等観賞用に意図的に導入後、野外逸出したと考えられる。冷涼な地域でも生育可能なため、全国に広がる可能性がある。

(国立環境研究所 侵入生物データベース参照)



ナガエツルノゲイトウ（写真提供：環境省）

I ナガエツルノゲイトウに関する基礎情報

(2) 生態

関東地方では、3月中旬から4月頃にかけて地下茎や根から萌芽し、夏から秋にかけて生長する。4月から10月頃に開花するが果実・種子は作らず、茎や根の断片が拡散して新たな株を作る。霜が降りる地域では12月以降に地上部は枯死し、地下茎の状態で越冬する。ただし、条件が良ければ、年間を通じて増殖し、開花することもある。

ナガエツルノゲイトウの生活サイクル

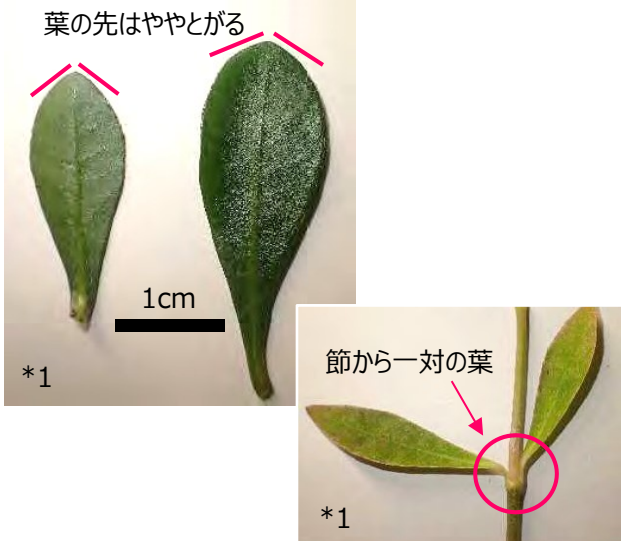
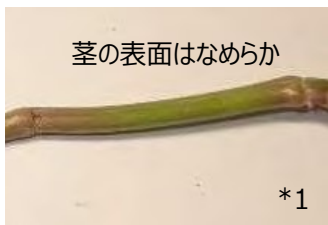
[illegible]

(写真提供：*1 農研機構 嶺田拓也氏，*2 環境省)

2. ナガエツルノゲイトウの形態

(1) 形態的な特徴

ナガエツルノゲイトウは葉・茎・花ごとに識別するための特徴があるが、単独の特徴だけでは難しい場合があるので、複数の特徴で判断することが望ましい。

ナガエツルノゲイトウの形態的な特徴	
【植物全体】 - 開けた場所では茎が横に這って広がり、あまり立ち上がらない。 - 巻き付くことはないが、支えとなる草や木があれば、寄りかかって立ち上がることがある。 	【葉】 - 節から1対の葉が付く(対生)。 - 葉の先がややとがる。 - 長さは2.5～5cm、幅は0.7～2cm。 - 葉の縁に非常に細かい鋸歯(きよし)がある。 
【茎】 - 茎は空洞(ストロー状)。 - 節に短い毛が生える。 - 茎の表面はなめらか。 - 節からよく分枝する。    	【花】 - 花柄は葉のわきから伸びる。 - 花柄の長さは約1～4cm。 - 花は、小さな花が集まった直径約1～1.5cmの球状花序。 

(写真提供：*1 農研機構 嶺田拓也氏)

I ナガエツルノゲイトウに関する基礎情報

(2) 形態が類似する植物

河川や水田、畦畔などの水辺にみられる、ナガエツルノゲイトウと間違えやすい植物の特徴を示す。

 : 外来種

ナガエツルノゲイトウに類似する植物の特徴

ツルノゲイトウ

(ヒユ科 **外来種**)

・節から1対の葉が付く(対生)。

・花は白く、球状の花序になり、葉の脇に直接つく。

※花がないとナガエツルノゲイトウと見分けが困難。



ミズヒマワリ

(キク科 **特定外来生物**)

・節から1対の葉が付く(対生)。

・葉は尖り、縁に鋸歯(きょし)がある。

・花は白く、球状に見える。



アメリカタカサブロウ

(キク科 **外来種**)

・節から1対の葉が付く(対生)。

・葉の鋸歯は明瞭。

・花は白く、平たい花序になる。



タカサブロウ

(キク科 **在来種**)

・節から1対の葉が付く(対生)。

・葉の鋸歯は不明瞭。

・花は白く、平たい花序になる。



メリケンムグラ

(アカネ科 **外来種**)

・節から1対の葉が付く(対生)。

・花は白く、花序は作らず、葉と茎の間に1つずつつける。



スベリヒユ

(ヒユ科 **在来種**)

・葉の先は丸い。

・葉は交互に付く(互生)。

・花は黄色。



シロツメクサ

(マメ科 **外来種**)

・葉は3小葉に分かれる。

・葉に白い紋がでるものがある。

・球状花の直径は約20mm。



ヤナギ類

(ヤナギ科 **在来種**)

・葉は交互に付く(互生)が、実生から出たての葉は対生のようにみえる。

・生長すると、しなやかな木の枝になる。



(写真提供：*1 農研機構 嶺田拓也 氏)

II ナガエツルノゲイトウの防除

1. 防除の考え方

(1) 防除の基本的な考え方

① 早期発見・早期駆除（手に負えなくなる前に対策を）

生長の初期、群落が小規模であれば、簡単に対策を行うことが可能。

② 粘り強く対応（複数の手段で根絶まで継続実施）

拡散力・再生力が非常に強く、わずかに生き残った個体や断片からも再生する可能性があるため、**密度が低下するまで、また密度が低下した後も**粘り強く対応する必要がある。

③ 周囲への拡散を防止（放置すると周りに迷惑）

河川や水利施設は、水を介して下流域や周辺の農地と繋がることから、被害を拡大させないために適切な対策を行うとともに、**水系として管理する視点**も必要である。

(2) 生態と防除のポイント

ナガエツルノゲイトウは侵略的な外来生物として、以下の生態的特徴がある。そのため、防除に際してはこれらの生態的特徴を踏まえて実施する必要がある。なお、国内に侵入している個体は種子をつけないため、植物断片による拡散に注意すればよい。

① 再生力が大きい

- ・茎は1 m以上伸び、枝分かれも盛んで放置すると群落が短期間で拡大。
- ・根は50cm以上も伸びることがあり、根が残ると再生する。
- ・根や茎の断片からも個体が再生する。一見枯れたように見える個体からも再生することがある。

【防除のポイント】

- ▶ 群落の規模が小さいうちに対処する。
- ▶ 根は地中のものも含めて除去する。
- ▶ 防除の作業中や防除した個体の移動中に、植物の断片が拡散しないように留意する。



直根は 50cm 以上伸びる

地下部は縦横に発達
(写真提供:農研機構 額田拓也 氏)



茎断片からの萌芽

(写真提供：環境省)



陸揚げされ枯れたように見える



2 か月後には再生

(写真提供：農林水産省)

II ナガエツルノゲイトウの防除

② 拡散力大きい

- ・茎はちぎれやすく水に浮くため、断片が水流によって運ばれ、新たな地で定着・再生する。
- ・大雨時の増水や水流によって、水系でつながっている広い範囲に拡散する可能性がある。
- ・水流による拡散以外には、鳥に植物片が付着して運ばれたり、釣り人の移動にともなって非意図的に運ばれたりする可能性がある。

【防除のポイント】

- ▶ 生育が確認された場合は、その水系の上流又は下流に、未発見の生育地が存在する可能性がある。
- ▶ 地域関係者と連絡を取り合い、行政単位によらず水系単位での対策が必要である。
- ▶ 種子は作らないため、植物断片を回収すれば生育域の拡大を阻止することが可能である。

拡散のイメージ



断片の拡散



漂着して定着



繁茂・拡大

(写真提供：農林水産省)

③ 侵略性大きい

- ・水辺から陸域まで生育し、特に日当たりの良い水辺では大群落となる。
- ・乾燥に強く、水辺だけでなく畑地などにも侵入する。
- ・耐塩性があり、沿海部・干潟にも生育が可能である。



海岸に漂着した個体の発根

【防除のポイント】

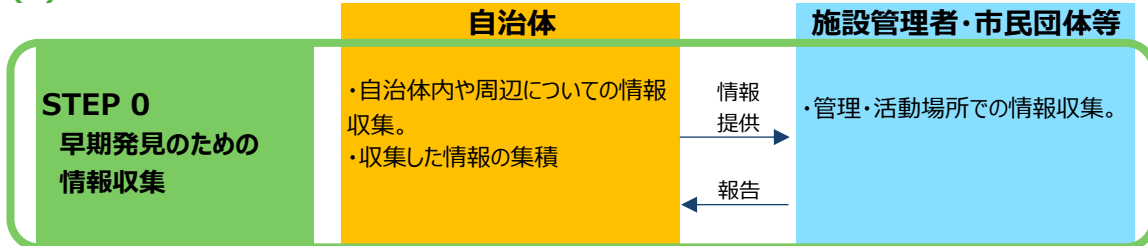
- ▶ 生育環境に応じた防除方法を選択する。
- ▶ 除草剤が使える場所（水田、畦畔等）であれば除草剤の使用を検討する。根や茎の断片からも再生するため、個体全体を枯らす除草剤が有効であるが、散布した薬剤が水系に流入する場所では使用できない（水田では止水期間を遵守する）。

2. 防除の流れ

生育・被害確認から防除の完了までの流れを示す。ここでは、防除に関わる主体として、**主に広域的・長期的な防除を担う「自治体」と、個別的・集中的な防除を担う「施設管理者・市民団体等」**に区分し、それぞれが行う防除の流れを整理した。

生育・被害確認から防除実施までの流れ

(1) 生育・被害の確認



生育・被害が確認されなかった場合
引き続き情報収集に努める。

(2) 生育・被害が確認された場合



II ナガエルツノゲイトウの防除

3. 具体的な取り組み

生育・被害確認から防除の完了までの流れに沿って、主に【施設管理者・市民団体等】(河川管理者、河川周辺の施設管理者、公園管理者、農業団体、農業従事者、自然観察等を行う市民団体、研究者など)が担う現地での防除の具体的な取り組みを整理した。

(1) 生育・被害の確認

STEP 0 早期発見のための情報収集

対象とする管理・活動場所(管理者・市民団体が管理したり、活動していたりしている対象地)でナガエルツノゲイトウの生育や被害が発生していないことを確認(情報収集)する。この調査で生育・被害が発見された場合には、直ちに「**(2) 生育・被害が確認された場合**」に移行し、生育・被害の詳細を把握し、速やかに防除に努める。

① 情報収集の方法

河川・水路などの水辺、水田・畑地などの耕作地を対象に、直接巡回する。または、各情報収集先に依頼し、生育・被害発生の有無を聞き取り調査することも可能である。

② 実施時期

侵入初期や定着初期は個体が小さく発見しにくい。そのため、直接巡回は、ある程度植物が成長した夏から秋にかけての6月～11月に行う。このうち、7～10月は開花の最盛期のため特に発見しやすい。

③ 情報の集積・共有

収集した情報を整理して、保存する。なお、将来侵入した場合に、いつ頃侵入したかを把握するために「**情報収集しても確認されなかったこと**」も記録しておく。整理した情報は、自治体や関係する施設管理者・市民団体等にも共有する。

(2) 生育・被害が確認された場合

STEP 1

生育・被害調査の実施

管理・活動場所でナガエツルノゲイトウの生育や被害が確認された場合、直ちに生育状況・被害状況の詳細な調査を行う。この調査では、防除計画や効果検証の基礎データとなるため、生育地点 1 地点ごとに状況を記録して、整理しておく必要である。

① 調査項目（◎：必須項目 ○：できるだけ記録する項目）

- ◎ 位 置：地図に位置を落とす。スマートフォンやハンディ GPS による座標情報もあるとよい。
- ◎ 写 真：上記の状況がわかる写真。河川・耕作地は同じような風景が多いため、位置を特定できるようにランドマークとあわせて写すとよい。防除作業の前後の比較やモニタリング調査で増減がわかるように、遠景・近景・生育状況などの写真があることが望ましい。
- ◎ 発見時の状況
 - ：その場所で最初の発見か、以前からあったかどうかを記録する。以前からあった場合は、いつごろからあったかも記録する。
- 生育状況：群落の大きさ(おおよそで可。例えば「○m×○m」など)。発根・開花状況など。
- 定着状況：漂着しているだけか、根が張って定着しているか。
- 被害状況：周辺の植物への被覆の状態。河川・水路の通水への影響、治水・水利施設への支障、農地への侵入の有無。
- 生育環境：周辺の環境、植生など。人工護岸の場合は、コンクリート護岸・積石護岸・蛇籠護岸・消波ブロック護岸など、自然河岸の場合は砂泥地・礫浜などの詳細を記録する。

② 実施時期

ナガエツルノゲイトウの生育・被害情報が把握した場合には、できるだけ速やかに実施する。

③ 記録の整理

調査結果は集計や活用がしやすいように、表形式で整理する。地形図などで被害確認地点をプロットする。**調査時に被害が確認されなかった場所も併せて記録する。**

II ナガエツルノゲイトウの防除

STEP 2

防除の計画の作成

生育・被害調査の結果をもとに、具体的な防除の活動計画を作成する。作成にあたっては、外来生物法他の法令を遵守する必要がある。

① 駆除の際の外来生物法上の注意点

【栽培・保管・運搬・譲渡・放出・植栽はしない】

- ・ ナガエツルノゲイトウは外来生物法により「特定外来生物」に指定されており、拡散を防ぐために栽培、保管、運搬、譲渡、放出、植栽等が禁止されている。
- ・ ナガエツルノゲイトウは再生力が高いため、駆除の際にまだ生存している個体(ごく小さい断片も含む)を運搬すると拡散させてしまう可能性がある。
- ・ 適切な手続きをとらずに生きた個体を保管・運搬すると法律違反となるため「② 駆除の準備」の適切な手続きをとった上で、注意深く駆除を行う。
- ・ 死んだ(枯れた)個体は規制対象外となる。「死んだ(枯れた)」とは、茎や根茎を含む個体すべてが完全に乾燥、もしくは腐敗した状態をいうが、判断が難しい場合がある。

特定外来生物について禁止されている行為



(出典)「ナガエツルノゲイトウ駆除マニュアル」

(農林水産省・環境省・農業・食品産業技術総合研究機構, 2023 / 画像提供: 農林水産省)

② 駆除に必要な手続き

実際にナガエツルノゲイトウを駆除する際には、駆除した個体を「生きたまま運ぶ」場合と「その場で枯らす」場合
 に必要な外来生物法上の手続きが異なる。**確実に枯れたかどうかの判断は難しいため、なるべく「生きたまま運ぶ
 場合」の手続きをとることが望ましい。**



上記の手続きの他、**河川で駆除作業を行う場合**は、河川法第 20 条「河川管理者以外の者の施工する工事等」により、河川管理者の承認が必要となる場合があるため、事前に当該河川を管理する機関に相談する。また、**農業用水路で駆除作業を行う場合**には、土地改良区および市町村の許可と地域住民への周知が必要である。

II ナガエツルノゲイトウの防除

③ 防除の活動計画の策定

防除の計画は、個別の管理・活動場所での具体的な活動計画を策定する。自治体全体を対象にした広域的・長期的な全体計画がある場合は、全体計画内に位置付けられるように自治体と相談するのが望ましい。

【活動計画】

- ・対象とする管理・活動場所への侵入状況、範囲、面積、環境の種類を整理する。
- ・侵入したナガエツルノゲイトウが定着段階(下図参照)を判断する。
- ・対象とする管理・活動場所における目標設定、達成段階の設定を行う。いったん定着すると、たとえ定着初期で駆除を実施できたとしても、長期間にわたる取組が必要になる。目標は、継続できる範囲で設定し、短期的には一段階前の定着段階を目指すのが望ましい(「定着初期」であれば「未定着」を、「分布拡大期」であれば「定着初期」を目指す)。
- ・分布拡大期・まん延期の場合は、管理・活動場所のすべての生育範囲を駆除対象にするよりも、特に保護したい場所で優先的に駆除を行う。着手しやすい場所から始めるのもよい。部分的な駆除の効果が得られれば、徐々に範囲を拡大する。

定着段階ごとの目標設定

生育	被害	定着段階	生育状況	目標	備考
 増加	 拡大進行	未定着 (完全駆除後の未生育状態を含む)	・対象地内に個体が見られない。	・未定着状態(完全駆除後の未生育状態も含む)を維持する。	
		定着初期	・断片的に個体が見られる。 ・地上部を全て除去できる程度。	・少なくとも地上部が消失するまで駆除する。 ・地下部も可能な限り除去し、「未定着」の状態に近づける。	・地下部の効率的な除去のための方法を検討する。
		分布拡大期	・多数の個体が見られ、生育範囲が拡大している。 ・生育範囲にあるすべての地上部は除去しきれない程度。	・地上部の拡大を抑える。 ・地下部も可能な限り除去し、部分的にでも「未定着」や「定着初期」の状態に近づける。 ・管理・活動場所のうち、保護したい場所で優先的に駆除し、周辺もできるだけ広い範囲で地上部を駆除する。 ・対象地外へ流出するおそれのある個体を駆除する。	・地上・地下部の効率的な除去のための方法を検討する。
		まん延期	・多少の駆除では生育範囲が減少しないほど広がっている。 ・生育範囲のうち、一部の地上部しか除去しきれない程度。	・管理・活動場所のうち、少なくとも保護したい場所だけでも集中的に駆除する。 ・対象地外へ流出するおそれのある個体だけでも駆除する。	・地上・地下部の効率的な除去のための方法を検討する。

- ・管理者・市民団体等による駆除は、「人力による抜き取り・剥ぎ取り」による方法から開始し、より効率的な方法が必要になった場合に他の方法を検討する。
- ・自治体、管理者(河川管理者、河川周辺の施設管理者、公園管理者、農業団体、農業従事者)といった関係者と防除について協議する。
- ・駆除作業の成果をモニタリング調査し、情報を蓄積する。
- ・管理・活動場所全体での生育状況の推移をモニタリング調査する。

【計画作成にあたっての留意点】

・専門的な知見を踏まえた順応的な計画づくり

ナガエツルノゲイトウは初期防除で根絶できなかった場合、長期的・計画的な対策が必要である。駆除する群落の規模や環境により、防除方法が複数存在するが、特に河川では様々な制限から人力による抜き取り・剥ぎ取りに限定される場合が多い。防除計画の作成は、研究者の意見や先行して対策を講じている自治体の実績など、専門的な知見を取り入れて行うことが望ましい。

計画作成後、防除が実際に開始された場合も、分布や被害状況は常に変化すること、新しい防除手法も開発されることから、防除事業の効果をモニタリングし、計画を順応的に改訂していく必要がある。

・自治体、他の施設管理者・市民団体等との協力・連携

ナガエツルノゲイトウの防除は早い段階から地域一体で取り組んでいくことが有効である。特に施設管理者・市民団体等は防除作業を担う主体になる場合が多いが、実際に駆除作業を行うには許認可や抜き取った個体の処分、費用などの問題が多い。また、長期間にわたり活動を継続していく体制づくりも必要である。そのため、自治体や他の施設管理者・市民団体等と協力・連携して進めることが必要である。

・初期防除の実施の重要性

自治体が外来生物防除を行う際に、生育・被害が報告されてから具体的な着手に至るまで、一定の期間が必要になる場合が多い。初期防除は、ナガエツルノゲイトウの発生場所の管理者やそこで活動する市民団体が防除を計画する方が速やかに着手できる場合も多い。

II ナガエツルノゲイトウの防除

STEP 3

防除の実施

生育・被害が発見された場合、野外からナガエツルノゲイトウを駆除する必要がある。また、駆除した場所に再びナガエツルノゲイトウが侵入したり、周辺に拡散したりしないよう予防する必要がある。ここでは、具体的な駆除・予防の作業を解説する。

① 駆除の方法の選定

ナガエツルノゲイトウの駆除方法は、実施場所や主体によって以下の方法がある。それぞれの方法には利点と課題があり、適用できる場所とできない場所があることが、できるだけ速やかに防除に着手するには「**人力による抜き取り・剥ぎ取り**」が望ましい。「人力による抜き取り・剥ぎ取り」では対応が難しくなった場合に他の手法を検討する。他の手法を検討する際には、自治体・専門家・関係する管理者等と協議する。

なお、不適切な方法は、かえって状況を悪化させる場合がある。例えば、**鎌や刈払機による地上部の刈り払い**は、**地下部の除去ができないため効果がない。むしろ、刈り払いによって植物断片を拡散してしまうおそれがある。**

ナガエツルノゲイトウの駆除の方法

手法	利点	課題	適用主体*1			適用場面*5				
			自治体*2	管理者*3	市民団体*4	湖沼 河川	ため池 ワンド	用水路 排水路	水田等 農地	農地周辺 畦畔 農道
物理的な駆除	人力による 抜き取り・剥ぎ取り	・細かい除去 ・作業効率低い ・断片回収が困難	◎	◎	◎	○	○	○	△ 回収・処理が必要	× 断片回収が困難
	大型機械による 抜き取り・剥ぎ取り (建設機械・作業船)	・費用が高い ・除去後の監視 ・除去後の処理	△	△	×	◎	○	△ 幹線水路の一部	×	△ 休耕地など
	ジェット水流	・水源の確保 ・適用できる場面が少ない	○	○	×	△	○	△ 低水深・低流速	×	△
	遮光シート	・耐久性に問題 ・流出防止対策が必要 ・面積当たりの費用単価が高い	○	○	×	○	○	○	×	◎ 畦畔等
化学的な駆除	移行性の高い除草剤	・労力少ない ・農地で一般的 ・回収不要 ・水系では不可 ・他の動植物等への影響	△	○	×	×	×	×	◎	◎

*1 予算的・技術的に容易かどうかを記載した。

◎：実施が非常に容易 ○：実施が可能 △：条件が厳しいが可能 ×：不可

*2 自治体：地方自治体

*3 管理者：河川管理者、河川周辺の施設管理者、公園管理者、農業団体、農業従事者など

*4 市民団体：自然観察等を行う市民団体、研究者など

*5 環境ごとの適用できる場面・環境を記載した。

◎：非常に効果的 ○：効果的 △：限定された場面で効果的 ×：適用不可

「農業水利施設を介し拡がる侵略的外来水草ナガエツルノゲイトウの防除と対策」を元に作成。

② 駆除の実施の通知

【生きてまま運ぶ】・【その場で枯らす】のいずれでも、また「① 駆除の方法の選定」に示すどの方法であっても、駆除作業に伴い、ナガエツルノゲイトウの植物断片がこぼれ落ちたりする可能性がある。特に水辺での駆除の際には水流による下流方向への拡散の恐れがある。「③ 駆除の具体的な方法」で示す下流への流出防止策を実施するほか、下流側の自治体・施設管理者等に通知してから、防除作業を実施するのが望ましい。

③ 駆除の具体的な方法

【物理的な駆除－ 人力による抜き取り・剥き取り】

ア. 事前準備

- ・駆除を実施する範囲を設定する。水深が深い場所など、危険箇所を明らかにしておく。
- ・駆除に必要な道具・機材をそろえる。

駆除に使用する道具：スコップ、シャベル、たも網、鎌、藻狩り鎌(柄の長い鎌)、地面や水面の断片を集める熊手

駆除した植物を保管する器材：バケツ・ビニール袋(30L 程度、大きすぎると持ち運べない)・土嚢袋・厚手のシート(ブルーシートなど)

駆除の作業員の装備：ゴム手袋、長靴、胴長、フローティングベスト(作業する水深に応じて装着)

流出防止策の器材：流出防止ネット、ネットの固定器具

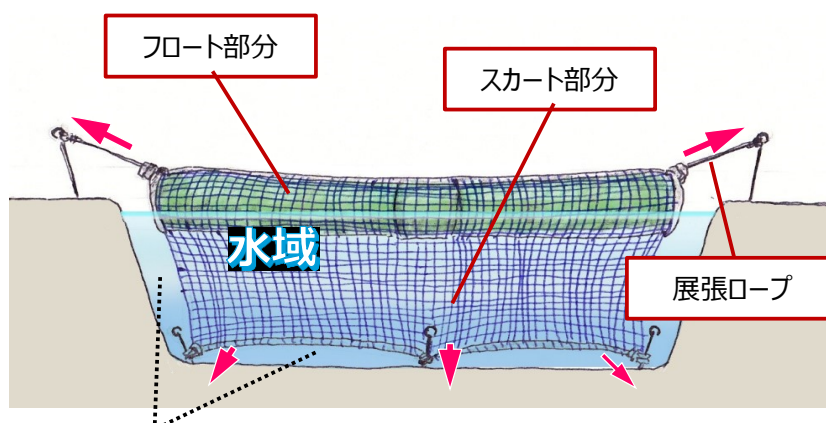


人力による駆除作業
(写真提供：鹿島川土地改良区)

- ・ナガエツルノゲイトウの形態的特徴、類似種との識別点を確認する。
- ・水辺や水域で駆除を行う場合は、オイルフェンス・ダストフェンス・網等を駆除作業現場の下流側の流路に張り、下流域への植物断片の流出防止対策をする。水面だけでなく、水底まで網を展開できるものが望ましい。



(写真提供：農林水省)



できるだけ隙間がないように展開

ダストフェンスとその構造図

II ナガエツルノゲイトウの防除

イ. 駆除作業

- ・ナガエツルノゲイトウを抜き取り、袋に入れる。根は可能な限り回収する。
- ・回収した個体を入れた袋を移動させる場合は、中身がこぼれないように注意する。
- ・回収した個体を入れた袋を仮置きする場合は、ブルーシートを下に敷くなどして、ビニール袋が破れたりした場合に備える。袋の隙間から突き抜けて萌芽することがあるため注意する。フラワースタンドなどで地面から離して置くのもよい。
- ・ナガエツルノゲイトウのみを駆除することが望ましいが、希少植物がない場所では、ナガエツルノゲイトウ以外の植物が多少混在してもよい(細かくより分けようとして、ナガエツルノゲイトウを採り逃すことがないようにする)。
- ・ガマ類やヨシなどの根元に絡み合って生育する場合は、ガマ類・ヨシごと除去してもよい(ガマ類・ヨシの群落は回復が早い)。

ウ. 駆除後の処理

- ・駆除した個体の総量を記録する。駆除した個体の量は乾燥した重量で記録するのが望ましいが、現地で乾燥させるのは難しいため、湿重量(水分を含んだままの重量)を測るか、袋の総数を目安として記録する。袋の総数を記録する場合は、袋の容量(リットル数)も記録しておくほか、いくつかの袋(泥やゴミなどがあまり混ざっていないものがよい)をサンプルとして重量を測っておくことが望ましい。今後、同じ場所で継続的に駆除する場合、駆除したナガエツルノゲイトウの量の増減の傾向を把握するための情報とする。
- ・駆除作業に関わった人数、日数・時間数も記録する。
- ・駆除した個体を袋にいれ、処理する。この際、十分に水気を切る。生きたまま運ぶ場合と、その場で枯らす場合があり、それぞれの手順に従う(p.11 ② **駆除に必要な手続き** 参照)。
- ・作業員の服装や使用した道具にナガエツルノゲイトウの断片が付着していないか確認する。
- ・流出防止対策のためのネットに付着した断片や、水面や地面にこぼれた断片を除去する。水辺ではたも網で底をさう。

エ. 利点

・他の方法より準備が少なく、早期防除として行うことができる。

- ・小さな個体まで、細かい除去が可能。
- ・在来植物を避けて駆除することが可能。
- ・市民参加型の場合は、普及・啓発にもなる。
- ・河川やワンド、草地などの自然地やその周辺で実施できる。

オ. 課題

- ・労力がかかり、大面積の群落での適用が難しい。
- ・地下部の除去が難しく、再繁茂のおそれがある。
- ・水深の深い場所での作業が困難。
- ・水田等の農地や、その周辺の畦畔・農道では適用しにくい。



駆除作業の様子

(写真提供：鹿島川土地改良区)

【物理的な駆除－ 大型機械による抜き取り・剥ぎ取り】

・適用場面の選択・実際の作業には専門家への事前相談が必要である。

ア. 駆除作業

- ・陸上や水際の群落は、集材用のスイングヤーダなどの重機により除去する。水域の群落は、水草除去のための作業船で除去する。

イ. 利点

- ・人力より広範囲・大量の群落を除去できる。
- ・作業船の場合は、人が作業できない深い水深の場所の群落でも除去できる。

ウ. 課題

- ・建設機械・作業船の調達が必要である。また、これらの機械が運用できる広さがある場所、安全な地形でなければ適用できない。
- ・人力による除去よりも採り残しが発生しやすく、駆除作業後の植物断片の回収が不十分な場合、群落が再生する可能性がある。



重機による除去

(写真提供：農林水産省)

【物理的な駆除－ ジェット水流】

・適用場面の選択・実際の作業には専門家への事前相談が必要である。

ア. 駆除作業

- ・消防用ノズルで噴射したジェット水流でナガエツルノゲイトウの地下部を掘削し、掘り出された個体を除去する。洗い流された植物断片は下流側で回収する。

イ. 利点

- ・地下部の駆除が人力より効率的。ただし、地下部の除去には複数回の作業が必要である。

ウ. 課題

- ・ジェット水流のための給水用エンジンポンプ、ホース、消防用ノズルを調達する必要がある。
- ・土壌や植生を損壊し、護岸を削るおそれがある。植生保全・治水の観点から適用できない場所がある。
- ・給水ホースが届く範囲に水源を確保する必要がある。
- ・土性が泥質の場所には適していない。

II ナガエツルノゲイトウの防除

【物理的な駆除－ 遮光シートによる群落抑制】

・適用場面の選択・実際の作業には専門家への事前相談が必要である。

ア. 駆除作業

- ・駆除の対象とする群落に遮光シートをかぶせ、固定する。
- ・遮光シートを撤去してもナガエツルノゲイトウが再生しない完全駆除には 1.5 年以上が必要であり(内藤, 2015)、継続的に遮光シートの設置状況や遮光部分の群落の生存状態を確認する。

イ. 利点

- ・設置作業に主要な労力が必要だが、それ以降はモニタリング・撤収作業のみで完了する。
- ・コンクリート法面の隙間に繁茂した群落、河川法面の草地に面的に広がっている群落には、他の方法による駆除が難しく、遮光シートによる群落抑制が有効である。



陸域の群落に重石で固定
(写真提供：農研機構 嶺田拓也 氏)

ウ. 課題

- ・耐久性が必要で、シートを突き抜けてナガエツルノゲイトウが生長する場合がある。
- ・面積当たりの単価が高い。
- ・設置により景観を損なうおそれがある。また、シート上はすべりやすいなど安全上の問題がある。

【化学的な駆除－ 除草剤を使った防除】

・除草剤を用いた防除は水田と畦畔に限定される。水系に流出するおそれのある場所(河川敷や水路など)では使用できない。 除草剤のラベル表示を確認し、適用場所・使用量・散布回数等を確認する。

ア. 駆除作業

- ・時期・場所ごとに適した除草剤を散布する。
- ・侵入口となる水口付近は丁寧に防除する。

イ. 利点

- ・少ない労力で効率よく駆除できる。
- ・農地では一般的な作業のため、新たな作業負担が少ない。
- ・駆除した個体は枯死するため、回収作業が不要。

ウ. 課題

- ・水系では使用できない。
- ・水田や溪畔に生育する在来植物に影響がある可能性がある。

STEP 4

モニタリング調査

ナガエツルノゲイトウはわずかな茎や根の断片から株が再生されることから、防除を行った場所でも短期間に完全に消滅することは難しいと考えられる。また、同じ水系に残存する個体群があれば、そこから新たに植物断片が供給され、定着する可能性がある。

これらのことから、ナガエツルノゲイトウの流域からの根絶は長い期間が必要になる。短期的には、特定の場所での群落の縮小・消滅させ、周辺への植物断片の供給源にならないようにすることが目的となる。防除は長期間にわたって実施する必要があるが、防除の実施範囲や手法の選択、防除の効果の検証などにはモニタリング調査が必要である。

① 防除の効果検証のためのモニタリング調査

- ・防除のための駆除作業にあたっては、作業実施前後の状況を記録しておく。特に、駆除の前後の群落の広がる範囲変化や、写真による景観の変化を記録しておく。
- ・駆除によって除去したナガエツルノゲイトウの総量を記録する(p.15【物理的な駆除－ 人力による抜き取り・剥ぎ取り】ウ. 駆除後の処理 を参照)。
- ・上記の 2 項目の情報は、同じ場所で継続的に駆除する場合、駆除したナガエツルノゲイトウの量の増減の傾向を把握するための情報とする。
- ・作業に関わった人員数・日数や時間も記録する。
- ・駆除後も、継続的にモニタリング調査を行い、取り残し個体や再生個体、新規の侵入個体の有無を把握する。これらの個体が確認された場合は速やかに再度駆除を行う。特に、駆除実施の翌年の春季には新たな萌芽に注意する必要がある。
- ・モニタリング調査の結果、再繁茂や再侵入の状況を把握し、設定した目標をどの程度達成できたかを検証する。

② 防除後のモニタリング調査

- ・防除のための駆除作業を注意深く実施した場合でも、駆除作業で往来した範囲や、水系の下流側などへ植物断片が拡散した可能性がある。このため、駆除実施後は活動場所および周辺でのモニタリング調査を実施する。
- ・供給源になるナガエツルノゲイトウ個体群を探索するために、より広い範囲で生育情報を収集することも重要である。供給源になる可能性がある個体群を発見した場合は、その個体群を駆除するか、そこから供給される植物断片が対象とする地域へ流入しないような対策をとる必要がある。
- ・これまでナガエツルノゲイトウが侵入していない場所は、そのまま未侵入段階で維持されることが重要である。また、完全駆除が達成できた場所も、再侵入しない状態で維持されることが重要である。このため、活動場所において継続的にナガエツルノゲイトウの侵入状況をモニタリングする。

＜作成協力＞

嶺田 拓也 氏

〔 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
植物防疫研究部門 雑草防除研究領域 雑草防除グループ 〕

中井 克樹 氏

〔 滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課 生物多様性戦略推進室 副主幹
滋賀県立琵琶湖博物館 特別研究員 〕

＜写真提供＞

鹿島川土地改良区

環境省

農林水産省

嶺田 拓也 氏

ナガエツルノゲイトウについてのお問合せは
こちらまでお願いします。

東京都新宿区西新宿 2-8-1
東京都庁第 2 本庁舎 19 階中央
東京都環境局自然環境部計画課
03-5388-3506

(令和 6 年 3 月 作成)